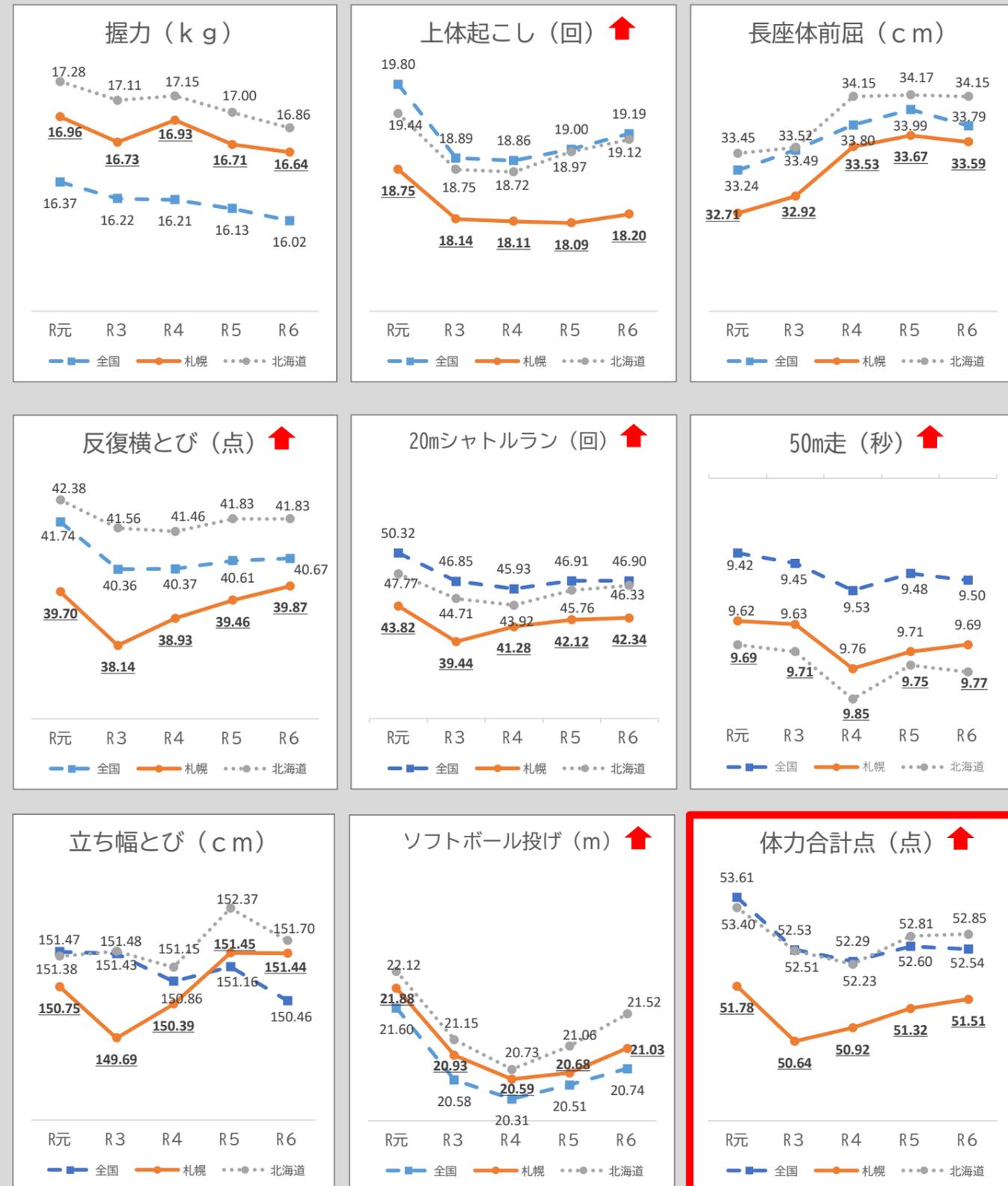


「実技に関する調査」の経年変化（小学校）

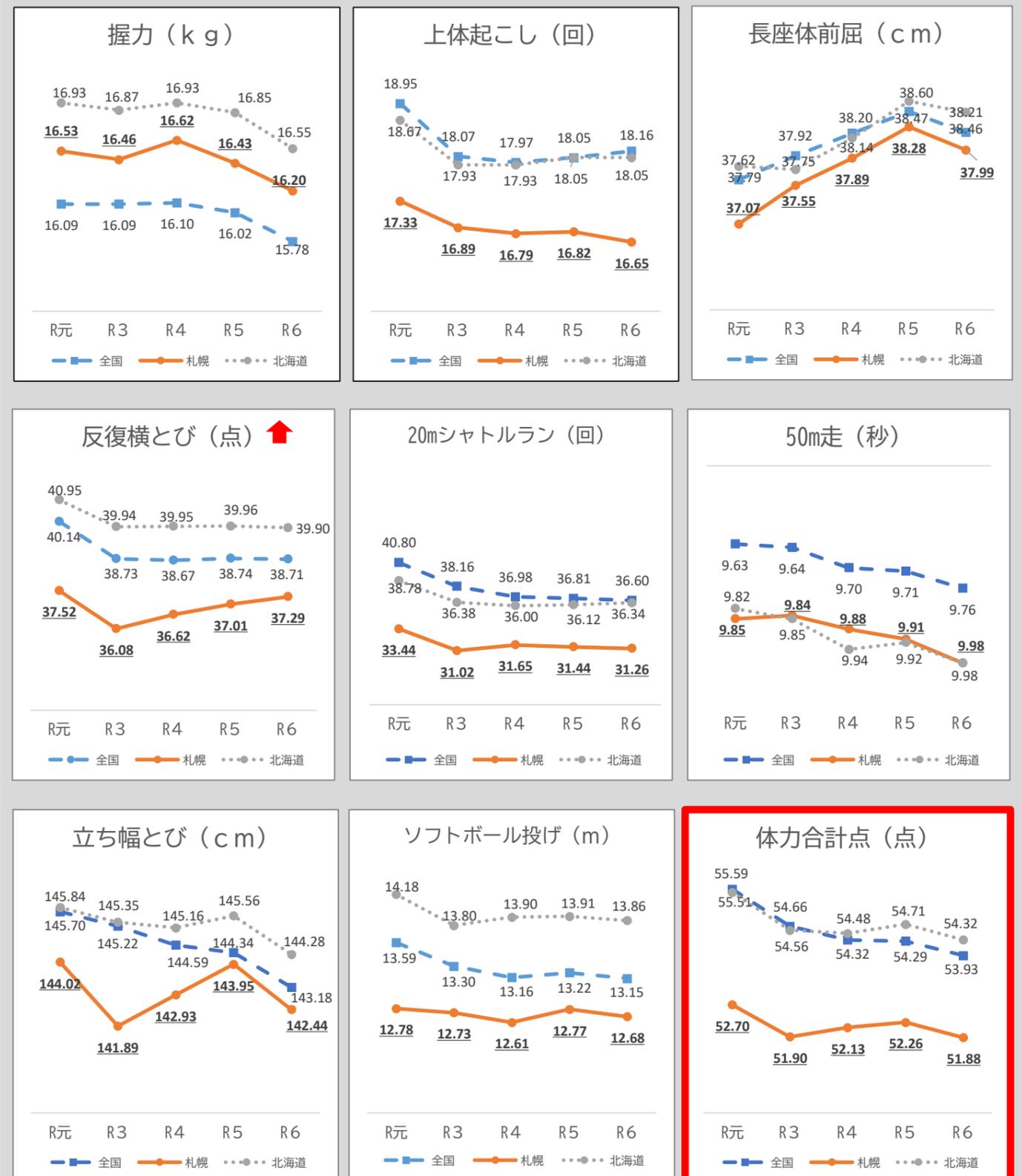
○昨年度より、小学校男子は5種目、小学校女子は1種目で向上が見られる。

○体力合計点について、男子は3年連続して向上の傾向が見られた。一方、女子については、2年連続して向上の傾向が見られていたが、今年度は低下している。

【小学校5年生 男子】



【小学校5年生 女子】



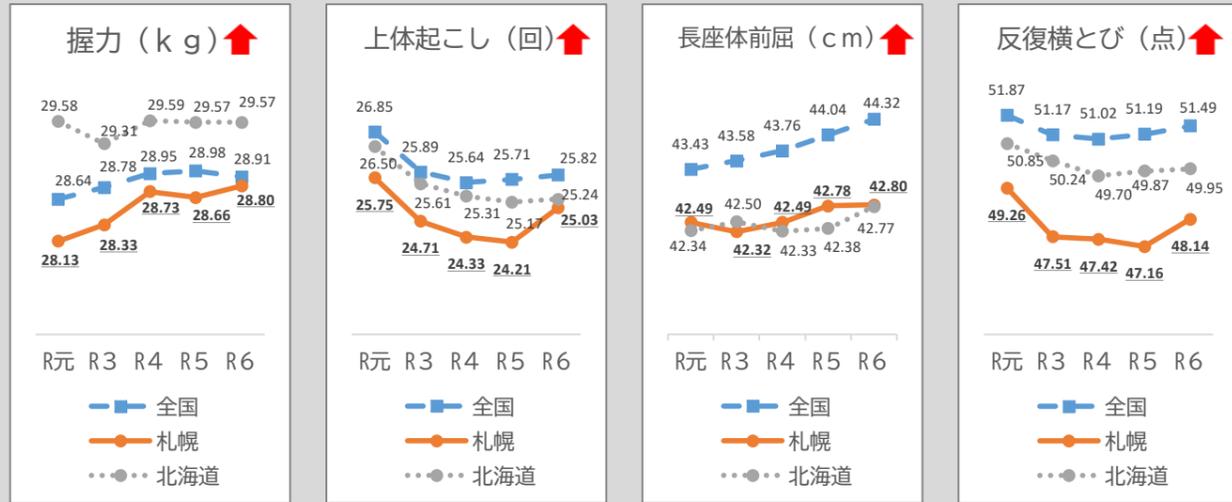
※北海道の値は、札幌市を除くもの

「実技に関する調査」の経年変化（中学校）

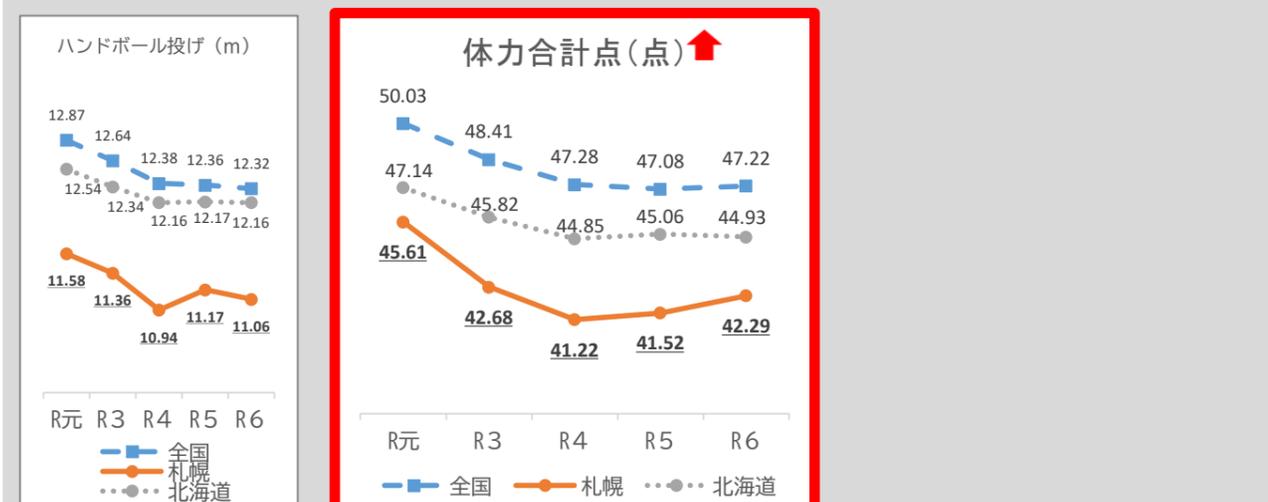
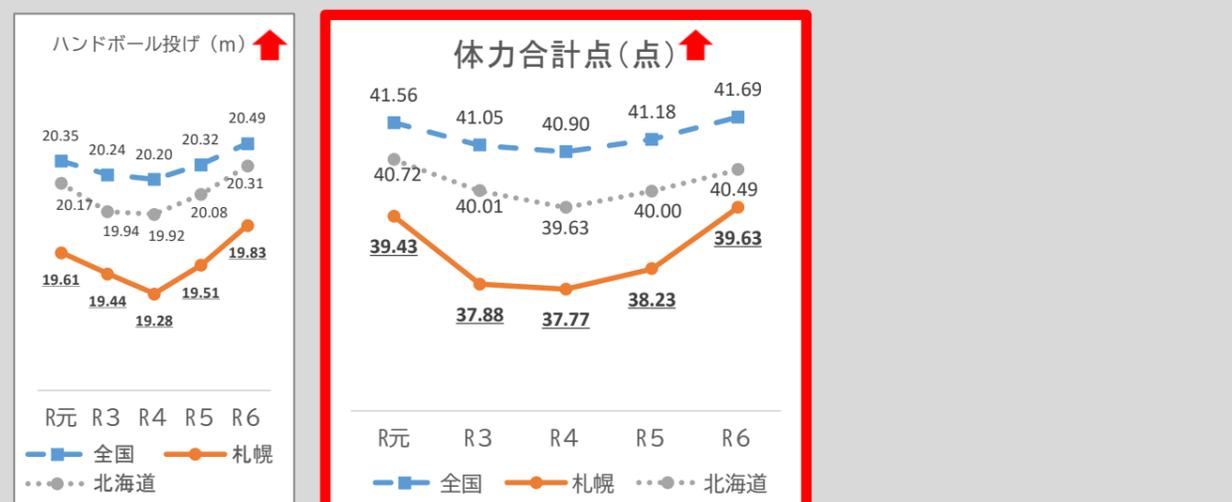
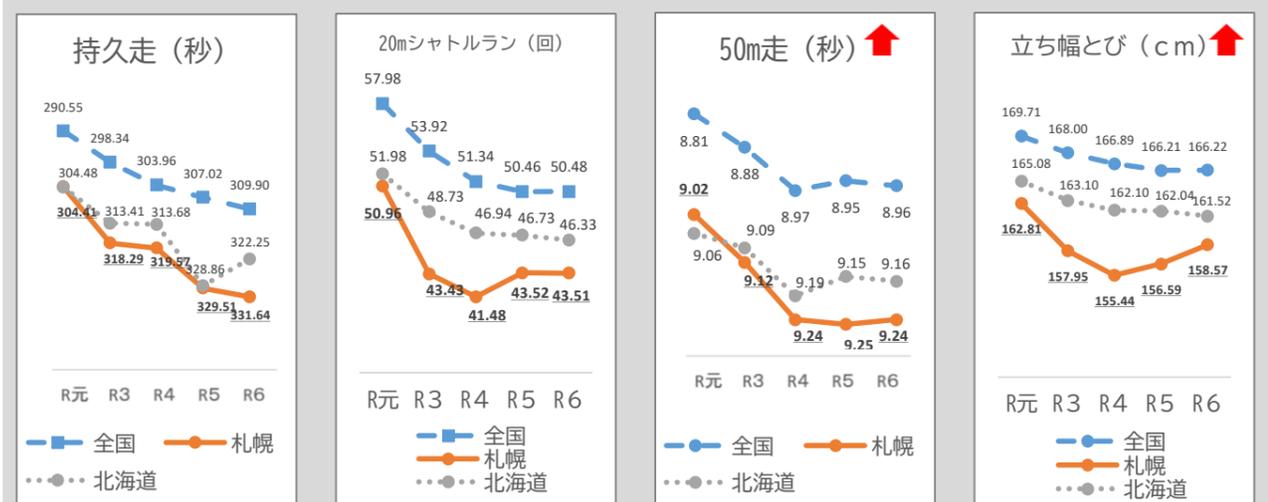
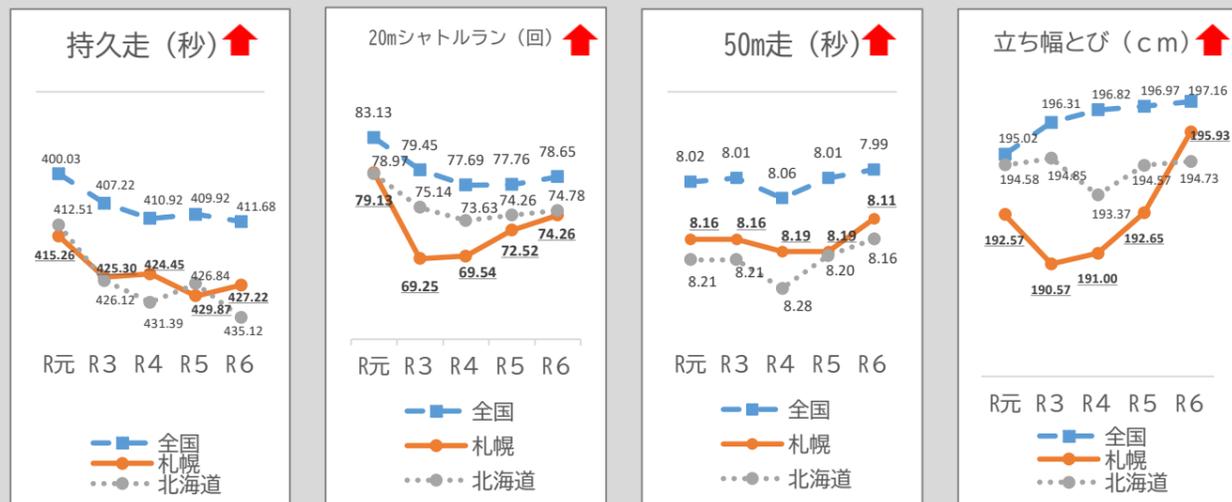
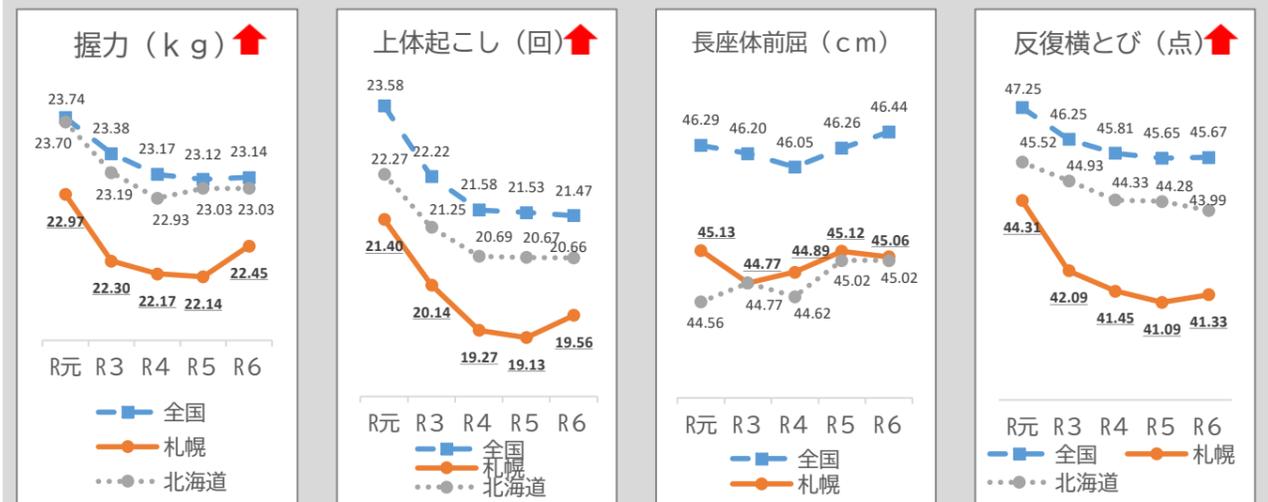
○ほとんどの種目で全国平均に届いていない状況であり、特に中学校の女子は全国平均との差が顕著である。

○体力合計点について、中学校男女ともに改善傾向が見られ、中学校男子については新型コロナウイルス感染症蔓延前の水準に戻っている。

【中学校2年生 男子】



【中学校2年生 女子】

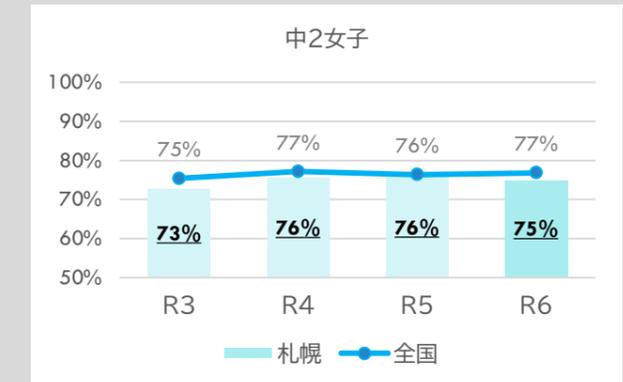
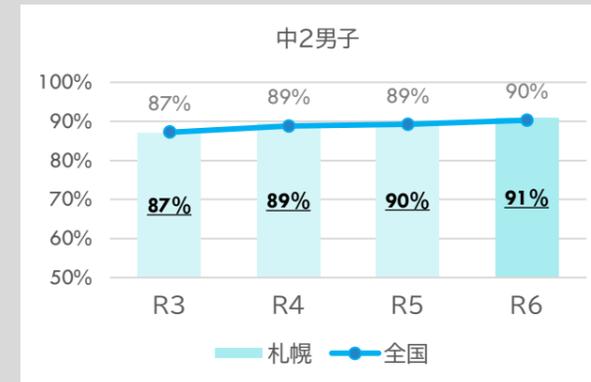
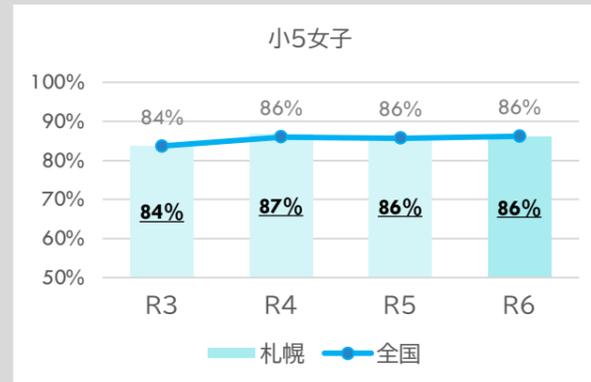
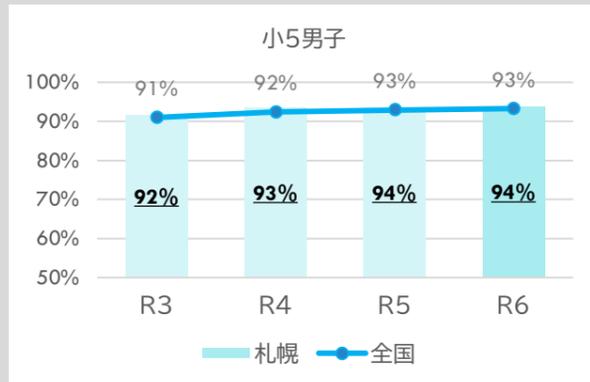


※北海道の値は、札幌市を除くもの

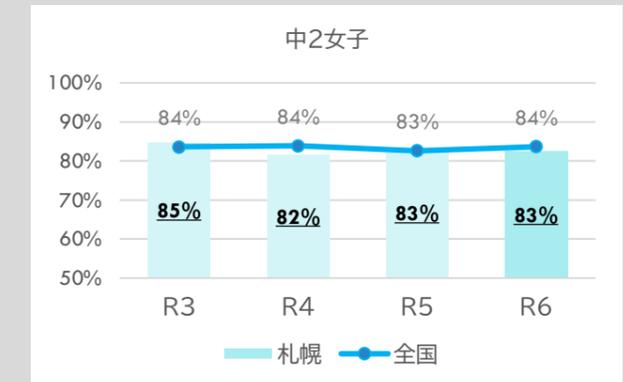
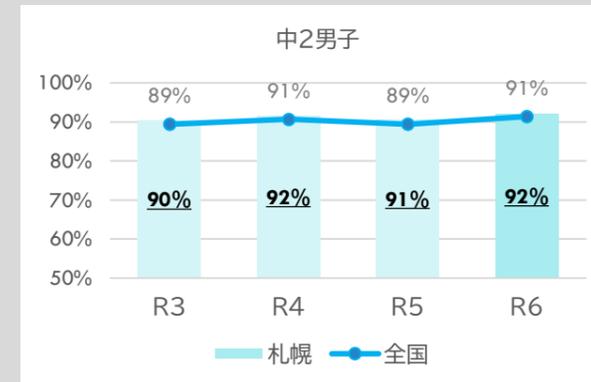
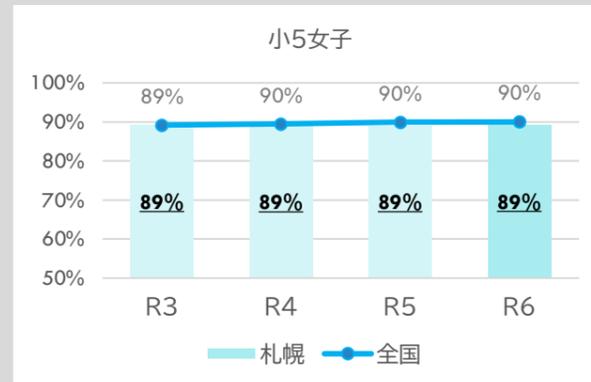
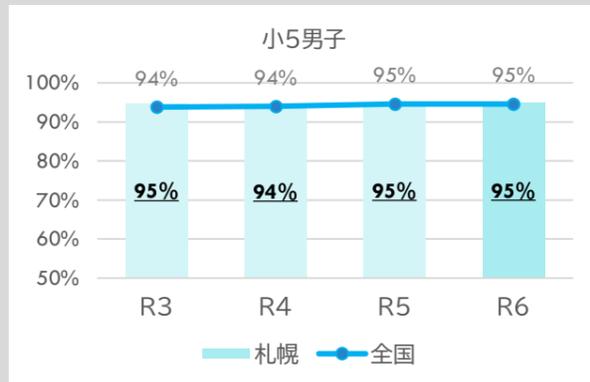
「児童生徒質問紙」結果の経年変化

- 「運動やスポーツが好き」「体育の授業は楽しい」の問いに対して、肯定的に捉えている児童生徒の割合を高い比率で維持している。
- 「体育の時間を除く1週間の総運動時間が60分未満の児童・生徒の割合」について、中2女子においては25%と高い割合を示している。

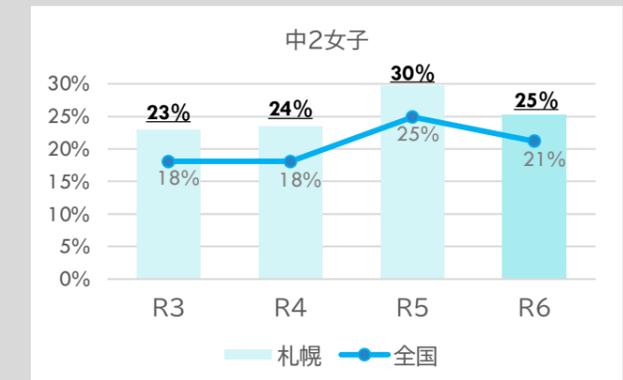
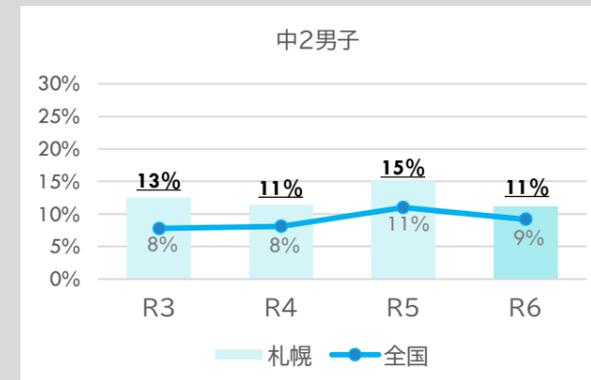
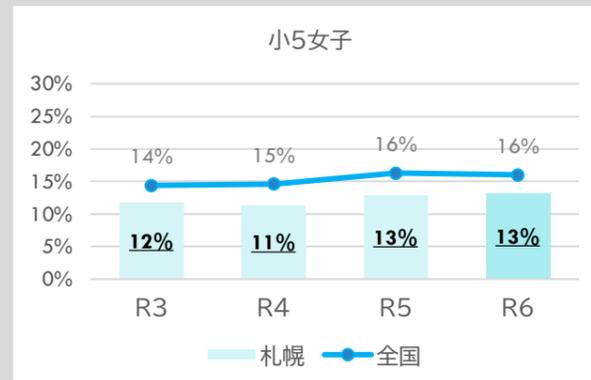
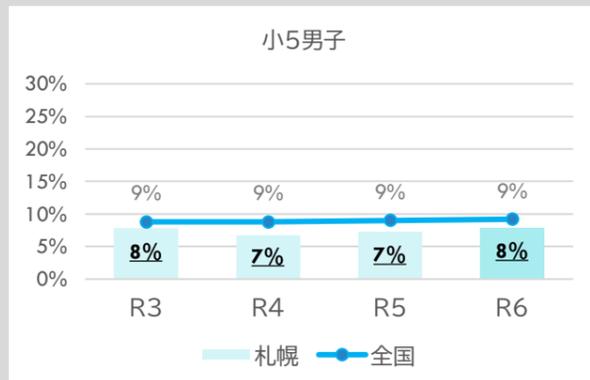
○「運動やスポーツをすることが好き」



○「体育・保健体育の授業は楽しい」



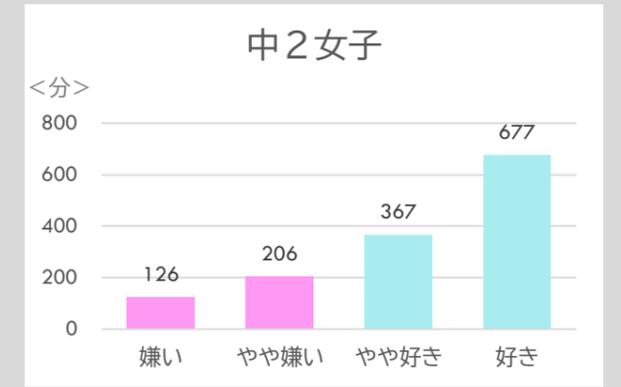
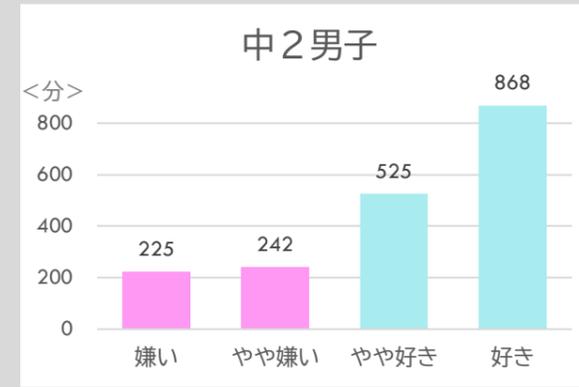
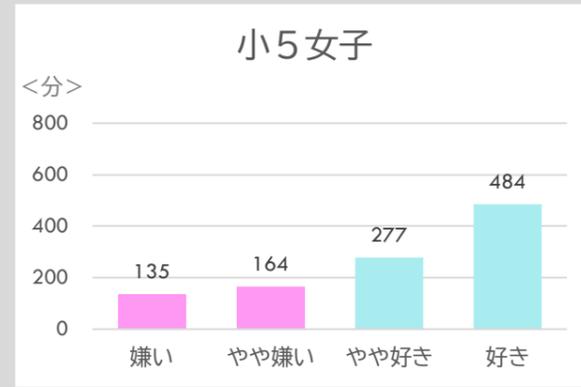
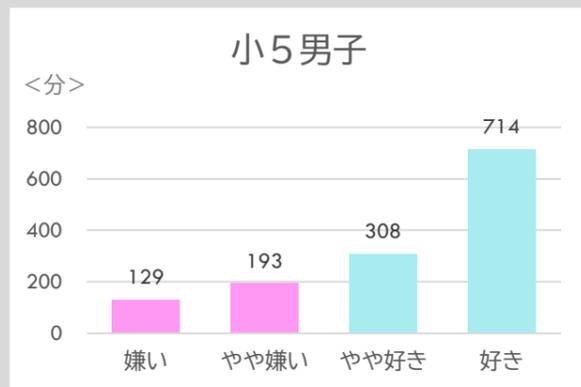
○体育の時間を除く1週間の総運動時間が60分未満の児童・生徒の割合



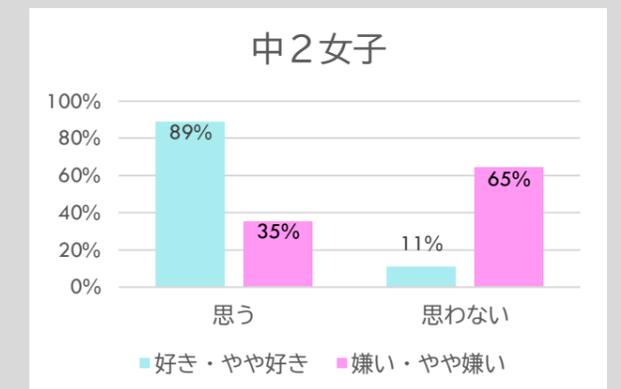
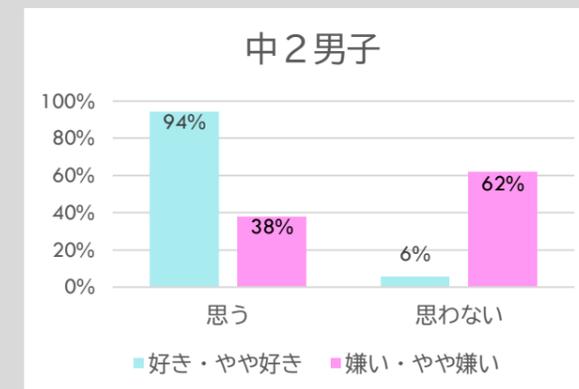
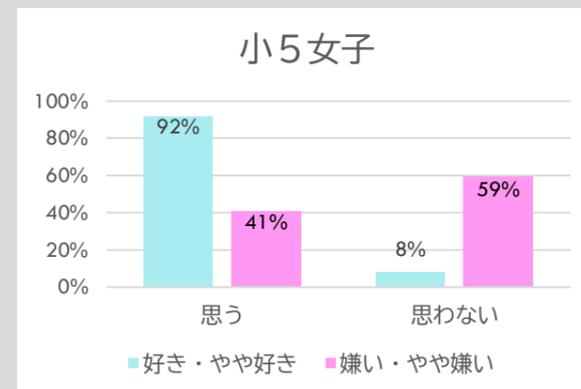
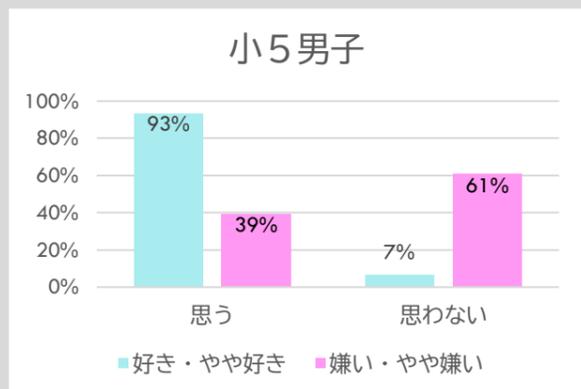
「運動が好き」と「運動が嫌い」の違いによる運動習慣等について

- 「運動やスポーツが好きである」という肯定的な思いが強いほど、総運動時間も長い傾向にある。
- 「運動が嫌い・やや嫌い」と答えた児童・生徒の割合について、男子はコロナ禍以前の水準に戻っているが、女子は微増傾向にある。

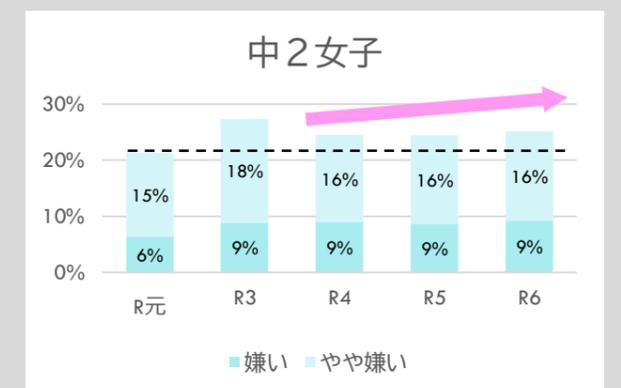
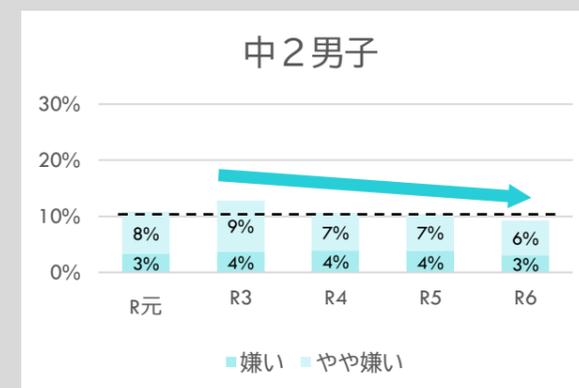
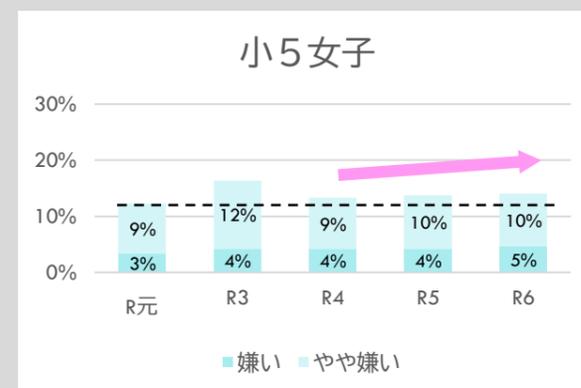
○「1週間の総運動時間」 × 「運動が好きですか」



○「卒業後も自主的に運動したい」 × 「運動が好き」の肯定・否定

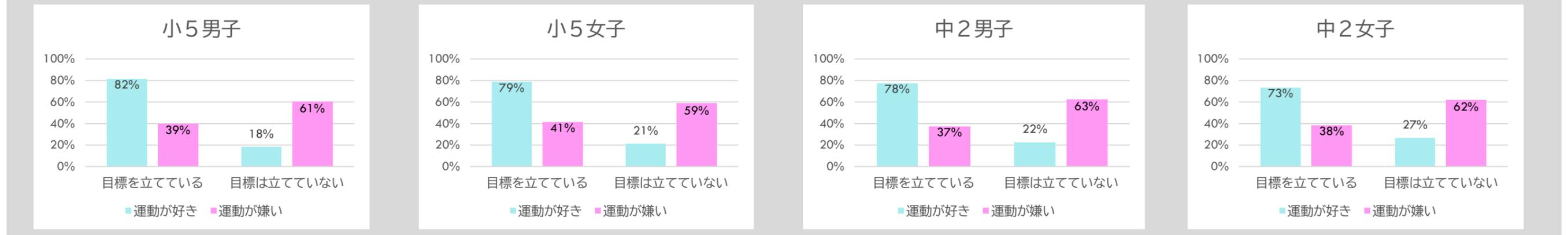


○「運動やスポーツが嫌いな児童・生徒の割合」の経年変化

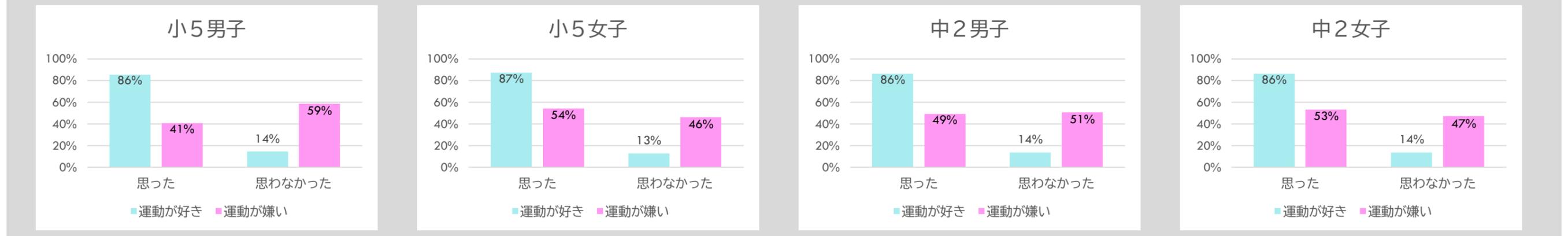


- 「運動やスポーツが好き」と回答した児童・生徒は、体力向上の目標を立てている割合が高い。
- 「体育・保健体育の授業が楽しいと感じるとき」について、教師の見立てよりも児童生徒の方が「友達との交流や協力したときに楽しさを感じている」と回答する割合が多い。

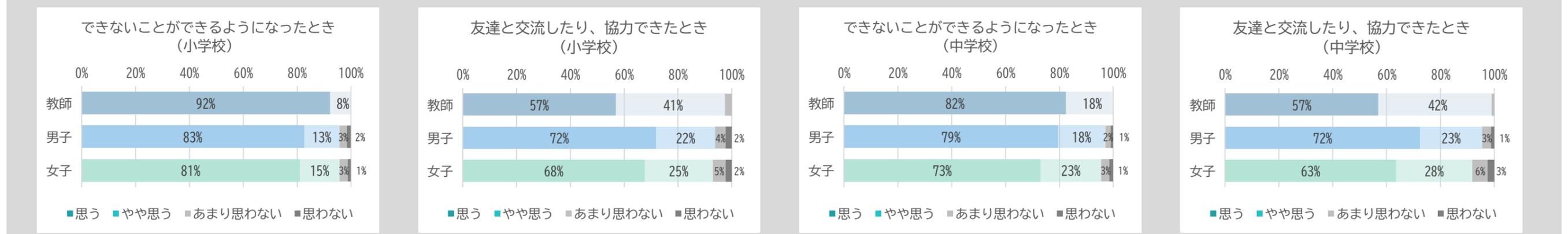
○体力向上の目標を立てている × 「運動が好き」の肯定・否定



○保健を学習して、もっと運動しようと思ったか × 「運動が好き」の肯定・否定



○「体育の授業が楽しいと感じるとき（と思われるとき）」における教師と児童生徒の認識について



令和6年度 全国体力・運動能力、運動習慣等調査

札幌市における今後の方向性について

【現状】

(1) 体力・運動能力、運動習慣について

- 体力合計点について、小学校男子は3年連続、中学校男子・女子は2年連続で向上している。
- 中学校男子については、全8種目で向上が見られるとともに、体力合計点については新型コロナウイルス感染症蔓延前の水準に戻っている。
- 実技結果について、小中学校男女ともに、ほとんどの種目で全国平均に届いていない状況であり、特に中学校の女子は全国平均との差が顕著である。
- 1週間の総運動時間について、小学校では多くの児童が授業外においても運動に親しんでいるものの、中学校では運動をしない生徒の割合が大幅に増加している。

(2) 児童生徒の意識及び運動能力等との関係について

- 「運動やスポーツが好き」「体育の授業は楽しい」の問いに対して、肯定的な回答を高い比率で維持できている。
- 「運動が嫌い・やや嫌い」と回答した児童生徒の割合は、男子においてコロナ前の水準と同様、もしくは下回っている。
- 一方で、女子においてはコロナ禍以前の状態には戻り切らず、横ばい、もしくは微増となっており、運動に否定的な層の中でも、特に女子に対するアプローチを考えていく必要がある。
- 「運動が嫌い」と思っている児童生徒は、「保健を学習して運動しよう」とする思いにつながっていない割合が高い。保健学習等を通じ、健康の保持増進の大切さを実感した時に、運動習慣へ関連付ける取組が必要である。

【今後の方向性】

- 誰もが運動の楽しさを感じられるよう「個別最適な学び」と「協働的な学び」を一体的に充実した「課題探究的な学習」を推進することにより、生涯にわたり運動やスポーツに親しむための資質・能力を育む。特に、「運動が嫌い・苦手」な児童生徒が、主体的に学習できるよう指導方法を工夫する。
- 児童生徒が運動や健康に係る課題を意識し、授業外や日常生活において自ら考え解決できるように取組を工夫する。その際、子どもの声を反映するなど、さっぼろっ子「自治的な活動」やコミュニティスクールとの関連付けを図る。
- 子どもが自ら健康の保持増進を図ることの重要性を実感し、運動習慣を身に付けることができるよう、保健の学習を通じて運動の大切さや必要性を理解したり、実際に体を動かして運動の効果を実感したりするなどの取組を進め、体育と保健を関連させた指導の充実を図る。